

## 子規と漱石

子規の「七草集」から漱石の文学志向の契機となった「木屑録」（房総漢文紀行）に対しての子規からの評価、感想を描いている。たいへんありがたく思いました。

このあと、「木屑録」の漱石の房州讃歌に魅了され、二年後の明治24年3月25日、房総を縦断する行脚にでた子規は房総紀行「かくれみの」を執筆しています。

子規の「木屑録」に対する感想は、関宏夫氏の手紙「ロンドンの焼芋」暮らしの手帖社の著書の中に子規の「木屑録」総評として書かれており、つづいて、蓑笠行脚「かくれみの」についても丁寧な解説がなされていました。

ここら辺の経緯は、関さんの房総紀行「木屑録」漱石の夏休み帳 崙書房出版が大変参考になります。

漢文読み下し、解説は、高校生以来の懐かしい学習でした。

近代日本文学史上、燦然と輝く明治の文豪・夏目漱石と近代俳句の祖・正岡子規との友情の舞台が房州の鋸山（千葉県安房郡鋸南町保田）にあります。

正岡子規が明治22年5月に詩文集『七草集』を親友の夏目漱石に示すと、漱石は丁寧な批評を寄せました。

『七草集』に触発された漱石は、同年8月房総を周遊して漢文紀行『木屑録』を執筆して子規に届けました。子規はこれを激賞しました。ともに詩文の友であることを確認しあつたのです。『木屑録』には、房州鋸山の悠久と自然の美しさが綴られております。

2年後の明治24年春、子規もまた更なる詩想を求めて房総を周遊し鋸山山頂からの眺望を漢詩に綴った紀行『かくれみの』を書きました。これを読んだ漱石は子規の着想のよさを讃えました。

以降、二人は生涯にわたっての絆を深めて参ります。のちに漱石は『こころ』などの作品に房州の自然や地理を取り込み、子規もまた房州の地名を織り込んだ俳句を数多く詠んでおります。

平成29年には漱石・子規ともに生誕（慶応3年・1867）150年を迎えます。

子規と漱石 友情がはぐくんだ写実の時代 小森陽一 著

正岡子規と夏目漱石との間における生涯を通じての関わり方として 手紙や葉書のやりとりはもとより、手書きの回覧雑誌から始まり、活字印刷された新聞や雑誌の紙面を仲立とした二人の関係、友情がある。

それは、一方が言葉による表現の作者になった時は、他方がその読者となる、という相互転換する関係こそが、子規と漱石の文学的友情の内実である。

漱石は生前の子規を自らの俳句の宗匠として位置づけた。そうすることが当時は不治の病だった結核を悪化させていく子規に精神的な生命力を与えようとする点、漱石の友情の表明であった。

第一の読者としての子規は嬉々として漱石から送られてきた句を検索してを繰り返していた。

東京と松山、あるいは熊本という形で離れていた子規と漱石は、明治日本が構築した、近代国民国家に不可欠な 活字印刷と郵便の制度を媒介として、作者と読者の役割を転換し続ける言葉のやり取りを続けたのであった。

漱石が手紙と共に肉筆で書いて子規に送っていた俳句は、時をへて子規が編集する新聞や雑誌に、活字印刷されて掲載されていくことになる。

それは、活字媒体を通じて俳句と和歌の革新を進めて行く子規にとって大きな支えとなった。

子規は漱石の手紙の読者であり、俳句については読者兼添削者でもあった。

そして、漱石から送られてきた俳句の中で、優れたものを活字媒体に掲載するときの子規は編集者となり、あわせてそれを論評する批評家という作者にもなった。

また、地方都市に暮らしていた漱石は、郵便で送られてきた新聞「日本」や雑誌「ホトトギス」の読者であると同時に、編集者子規に俳句を選ばせることにより、活字媒体における作者ともなっていたのである。

作者と読者の役割を相互に往還する、ふたりの文学的関係は、漱石がロンドンに留学した後も継続している。

七つの海を支配していたはずの大英帝国の没落を、19世紀最後の年から20世紀の初めにかけて、ロンドンで目のあたりにした漱石は、その思いを子規に私信で送った。その手紙の文章を架け橋として、子規はまるで自分が海を渡って、ロンドンに往ったかのような思いになった。

読者としての子規は、直ちに編集者になり、この私信に「倫敦消息」という題名をつけ、さらに著者名を「漱石」として「ホトトギス」に掲載したことで、

「漱石」という写生文作者が誕生した。

そしてロンドンの漱石は、その読者となった。

「ホトトギス」におけるロンドンの漱石は、子規のの病床の「写生文」で友の病状を詳細に知らされる。

その子規から、もい一通だけでいいから、「倫敦消息」と同じような手紙が欲しい、という依頼がロンドンの漱石に届く。

こうした子規と漱石の間でどのような近代日本語の表現の水準が生み出されたのかを本書は記述しようとしている。

日本語の短詩型文学の表現を分析する訓練を受けず、学習していない私ができることは、「社成分」や批評文を中心とした散文について記述することに限定せざるを得ない。

しかし、短詩型文学の指導者子規とその弟子となった漱石との言葉のやりとりからは、私たちが使用している現在の日本語の、意識しなくなった文学の力が、くっきりと見えてくる。

#### 子規と漱石と近代日本 柴田勝二 編

正岡子規は、写生や俳句をどのような表現手法として考え、確立させ、創作を続けたのか。

そしてそれは 夏目漱石にどのような影響を与えたのかを 詳細に考察。

同時に 子規・漱石をはじめとした日本文学の翻訳状況や、世界からどのように読まれているのかの考察。近代文学と近代史をつなぐ論考から近代日本を再興する。

2017年は 正岡子規と夏目漱石の生誕 150周年に当たる年であった。

子規と漱石が生まれた 1867年は江戸時代の棹尾となった年であり、したがって二人はまさに明治日本の進み行きとともに人生を歩んだ文学者であった。

彼らがその年に生まれていることは偶然であるにしても、彼らの文業や言説を眺めると、やはりそこには看過できない意味があらわれているように思われる。

彼らと比べると 三回り近く上の福沢諭吉は「一身にして二生を経る」と自ら言ったように、江戸と明治という二つの時代をほぼ半分ずつ経験しており、江戸末期には幕臣として日本が列強に震撼されつつ新しい時代に乗り出して行く様相をつぶさに眺めていた。

一方二人よりも五歳年長の森鷗外は、ほぼ同時代人といってよいが、津和野と言う地方に生まれ、藩御典医を務める家柄なのであることもあって、江戸時代の空気を強く呼吸して育った人物である。

江戸時代を舞台とする作品が多いだけでなく、衛生学者としても 長期間のドイツ留学を

経験しながら 帰国後は、日本古来の衣食住の伝統を擁護する言説を展開するなど、近代の開化に背を向けた一面を持っている。「石見の人森林太郎トシテ死セント欲す」という遺言にしても 自身のうちに息づく近代以前の風土に拠り所を求める鷗外の資質を物語るものとして受け取れる

福沢や鷗外と比べれば子規も漱石も江戸時代に対する愛着よりも 自分たちと共に始まった明治という時代に同一化する傾向が強かった

子規が司馬遼太郎の「坂の上の雲」の中心人物の一人であることは示唆的だが のちに病によってその雄姿が 挫（くじ）かれることになるものの 当初は「太政大臣」になることを夢見、また、野球に打ち込む快活な気質の持ち主で 健康が許せばあるいは彼は政治の世界で日本を率いる人材となったかもしれない

漱石は近代批判の知識人というイメージが強いが 江戸時代を舞台とする作品が全くないように そのまなざしは、自身が生きる同時代につねに向けられていた

上滑りの外発的な開化を批判的に語るのも 言い換えれば漱石がそれだけ円滑な開化によって日本が欧米と肩を並べならべるだけの近代国家になることを切望していたということでもある

子規よりも長く生きたとは言え、神経症や胃痛に苦しみ続けた挙げく、満 49 歳でその生涯を閉じねばならなかったのは 外界進み行きに対する 彼の慮り（おもんばかり）がその身体を疲弊させた帰結でもあった

もし漱石が少年期から愛着し続けた中国古典の世界に 耽溺（たんでき）しえる人間であったならもっと 長命を楽しんだかもしれない

明治の年と満年齢が同じである両者が交わりを持った明治 20 年代は 不平士族の反乱から自由民権運動に至る国内の動乱がひとつとわり沈静し、帝国憲法や教育勅語の発布によって国民国家の体制が整備されていくとともに 日本は否応なく外国の動向に巻き込まれていく時代であった

とりわけ、中国（清）・朝鮮といった東アジア諸国との関係は、その北方にあるロシアという大国からの脅威を中継する意味をはらむこともあって、日本が腐心し、また過剰なまでの干渉を敢行（かんこう）しようとする対象であった。

朝鮮の独立を確保することを目的として行われた日清戦争は、その中心的な出来事だったが、子規がこの戦争に従軍することを熱望し 周囲に無理を聞いてもらって清に渡ったことはよく知られている

けれども子規が着いた時には既に戦闘はほとんど終結しており その帰途での 吐血がそれ以降の長い仰臥の始まりとなった

またこの戦争は日本における中国の 価値下落を将来したが、それが漱石の失望を招き、その近代批判の起点をなすことになったことが想定される

その点でこの近代日本最初の対外的な戦争は両者のそれぞれの行く末を左右する意味を持つことになる出来事でもあった

子規と漱石を間に合わせる直接の場となったのは周知のように俳句の創作で 本書でもそれを一つの焦点としている

短歌と比べると俳句は内面の 綿々とした情感を語るよりも、外界の一断面を切り取ることに長けた形式だが、自身が五感を持って住み込む世界の様相と相渡る比重の高いこの形式に青年期の両者が取り組んだことは 彼らのまなざしをそれぞれの形で外界に向けさせる 機縁ともなった

子規がとらえたのは、自然の息づく外部世界の姿であり そこから 「写生」の理念も生まれてくるが、漱石はそれに学びながらも、内面の思念を重んじる姿勢は、やがて彼を「我」をどうして「非我」としての外部世界を括り取る小説家への道を歩ませることになった

そこには「非我」のひとつの中心として、日本が近隣アジア諸国に対して持った振る舞いが映し出されているのである。